

書 評

医療体育研究会 編

脳血管障害の体育—片麻痺者の体力評価とトレーニング

大田 仁史 (伊豆通信病院)

この本を読んでいるいろいろ思い出した。

もう 20 年も前になるが、片麻痺のしかも失語症の患者さんたちと連れだってプールにいった。参加した片麻痺の人たちは病前は泳げる人ばかりだったが、皆犬掻きの出来損ないみたいで溺れているような格好になる。そのとき真っすぐ進まず麻痺のあるほうにくるくる回ってしまうのをどうしたらいいか、などをプールサイドで議論したが、なにせ言葉が不自由なのと付き添った ST の中に泳げない者がいて結論を得られなかった。しかし二、三度行くうち皆うまくなった。その後、元気のいい何人かの片麻痺の患者さんが水泳をしてとても気持ちがよいという話を聞いた。感心するばかりで確信をもってアドバイスしてあげられなかった。水泳だけでなく、片手でのゴルフに挑戦していろいろの道具を作った人もいる。ゴルフとまではいかないがゲートボールを片麻痺用にアレンジして大勢で楽しんでいるグループもある。このような人たちを知るにつけ運動機能にもっとも詳しい私たちが患者さんたちのスポーツについては知識が少なく、その可能性についてきちんとした指導をしていないことに改めて気付かされた。

医療体育研究会の人たちが熱心に議論しているのを知っていたが、このような立派な本を出版されるとはその熱意に感心するばかりである。序に「医学と体育学をリハビリテーションという一つの帯で結びつけた」と述べられているが、きっと若き研究者たちは心地よい達成感を味わっているだろう。つぎつぎ改訂版をだしてほしい。

内容については少ない紙幅で説明できないのが残念だが脳卒中の患者さんのリハビリテーションに関わる人たちはぜひ目を通されるとよい。病院の訓練では痙性とか共同運動といった片麻痺の特徴にこだわり、動作を制限しすぎる傾向がある。保険診療報酬の関係で医療の場に体育を専門にする人が少なく発言の力が弱いこともこの領域の研究を阻害しているのだろう。そういう意味でこの書に触れて目から鱗を落とされる人もいると思う。

付録に関連文献、体育レクリエーションを実施している医療施設、脳血管障害者が利用できるスポーツセンターおよび体育施設について詳しく紹介されているのは著者らの真面目さと努力が自然ににじみ出ていて好感がもてる。座右の書としてお薦めする。
(A 5 293 頁 3,914 円(税込) 1994 大修館書店刊)